

例会記録

第51回神奈川地方会秋季例会・日本医史学会

合同例会

平成30年10月13日(土)

鶴見大学会館

I 推薦講演

1. ベスト菌DNAの進化から見たペスト流行史
加藤茂孝 先生
2. 琉球における全身麻酔下での口唇裂手術
桐生迪介 先生

II 特別講演

マルチン・ルターの病歴 滝上 正 先生

III 特別企画《医史からみた幕末・維新》

1. 西郷隆盛の体調不良問題とその背後にあったもの
家近良樹 先生
2. 特別ゲスト：竹内恵子さん

日本医史学会10月例会

平成30年10月27日(土)

順天堂大学10号館1階105カンファレンスルーム

1. 神農の足跡を迎る
——医学・農業面で我が国に多大な影響を与えた中国の偉人——
中村直行
2. 日本橋漬物商小田原屋主人早川佐七の本草書蒐集とその周辺：島田筑波・武田久吉・伊藤純一郎(杏雨書屋)との交流
吉川澄美

例会抄録

故医学士神田知二郎君紀念之碑からわかったこと

寺島 俊雄

神戸大学医学部キャンパス内の神緑会館に県立神戸医学校の校長で県立神戸病院の病院長であった神田知二郎の業績を顕彰する大きな石碑「故医学士神田知二郎君紀念之碑」がある。高さは3メートルほどもあるだろうか。この石碑は神戸大学医学部附属病院に隣接する広厳寺(別称 楠寺)境内にあったが、平成13年に医学部キャンパス内に移設されたものである。知二郎は安政元年8月8日に生まれ、明治13年に東京大学医学部を卒業した。同年10月公立姫路病院長に就任し、次いで明治15年3月に公立神戸病院附属医学所長に転じ、同年4月に県立神戸医学校の校長となる。さらに明治16年5月に県立神戸病院長を兼任する。知二郎が臨床と教育に精励したこともあり神戸医学校と神戸病院は発展する。ところ

が地方税を医学校の経営に支弁することを禁じた勅令48号(明治20年発布)により明治21年3月神戸医学校は他の多くの公立医学校とともに廃校となる。明治22年3月28日、もとより蒲柳の質であった知二郎は肺疾により享年36歳(満34歳)の若さで死亡する。この石碑の碑文は知二郎が東京大学医学部で学んだ当時の学部長の長と専斎の起草によるものである。碑文の内容はすでに発表済みであり(文献1)ここでは繰り返さないが、二点ほど疑問が残った。

その第一は「白栖村の先人の塋域に帰葬す」と碑文にある知二郎の墓の所在である。白栖村とは現京都府相楽郡和束町白栖であるが、それだけでは墓の位置の特定はできそうにない。しかし「巍峨たる笠置の山麓を滔々と流れる木津川の、

加茂という渡船場を渡り、旧都信楽^{しがらき}に歩みを進める二里の山間、此処は京都府相楽郡白栖村。数代医を業とせる一軒あり。是ぞ恩師神田先生の御生家なり。」という教え子の長澤亘の記載通りに歩むと知二郎の墓を発見できるかもしれない(文献2)。そんな淡い期待を胸に秘めて、私は平成26年3月1日に阪神青木駅より近鉄奈良線にて奈良に向かい、JR 関西本線に乗り換えて加茂駅にて下車した。木津川の土手を東に歩み、今は無い加茂の渡し場に架かる恭仁大橋^{くに}を渡って対岸に至り、国道163号を笠置方面に向かって歩いた。ついで和東川沿いの県道5号を伊賀信楽方面に向かったところ、白栖口というバス停に出会った。ここで県道に別れを告げ薄暗い山間の小道を北に30分ほど歩むと、急に視界が広がり一面茶畑の白栖地区に辿りついた。土地の人に白栖地区の共同墓地の所在を聞いて小高い丘の上に向かう。共同墓地には百基以上の墓があったが、あっさりと知二郎の墓を発見できた。もとより知二郎の墓を発見できるとは思ってもいないから、体が震えるほどの興奮を覚えた。墓の正面には医学士神田知二郎墓とあり、右側面は損耗が激しく読み難いが知二郎の命日と戒名が記されていた(文献3)。

碑文に関する第二の疑問は「高階氏に配すも子無く」の高階氏とは誰かということである。実は墓を発見した当日、墓所を管理する白栖地区の区長宅を訪れ、知二郎の直系の子孫(奈良市在住)の紹介を得た。電話したところ先祖伝来の6葉の写真と神田家代々の戒名一覧を保存していることがわかり、郵送していただいた。6葉の写真とは、神田知二郎、兄の神田新作、侍医高階経本、侍医高階経徳、有栖川宮威仁親王、同親王の生母森則子の写真である。侍医高階経本は東京大学医学部を明治12年に卒業した知二郎の一年先輩である。経本は卒業後、引き続き東京大学雇となり、助教授等を経て明治16年秋田県公立大館病院長となる。その後、明治19年に大館病院長を辞し、東京に戻り侍医となる。高階経徳は幕末から明治初期に活躍した漢方医^{こうめい}で、孝明天皇や明治天皇の侍医を務めた。有栖川宮威仁親王は肺結核となり、神戸の舞子離宮(現舞子ヴィラホテル)にて

療養していたこともあり、有栖川宮家と関係が深い経徳は、東京から神戸に居を移していた。威仁親王とその生母の森則子の写真が神田家に保存されていた理由は、宮家と高階家の密接な関係を示すものである。以上のことから碑文の高階氏とはこの侍医高階家に違いないと確信した。しかし、残念ながら同封の神田家戒名一覧には知二郎の姻戚関係を示す記載は無い。そこで高階家のサイドから神田家との姻戚関係を探ることにした。web上で高階経徳・経本を検索したところ、堀江幸司氏による江戸東京医史学散歩というサイトがヒットした。堀江氏によると昭和62年11月、染井霊園の高階経徳・経本他の高階家10基の墓は「高階家之墓」1基にまとめたとのことである。改葬者は高階経和氏である。実際に染井霊園を訪れ、高階家之墓の墓誌を調べたところ堀江氏の記述に間違いはない。そこで高階経和氏の名前でweb検索したところ循環器内科医の高階経和博士がヒットした。高階経和氏は昭和29年に神戸医大(現神戸大学医学部)を卒業された方で、臨床心臓病学教育研究会の理事長を務め、心電図のテキストの他、心臓聴診のシュミレーター・イチローの開発者として名高い。そこで高階経和氏に侍医高階家との関連を問い合わせたところ、高階経徳・経本の後裔であることが判明した。そこで経和氏が所蔵する高階家文書に知二郎と高階家との姻戚関係を示す記載があるか調べていただいたところ、高階経徳の二女 信江が知二郎の室であることが判明した。高階経和氏は詳細な高階家の家系図を作成し大北医報に報告した(文献4)。大北医報は、秋田県北部の大館・北秋田医師会の発行するジャーナルで、地域の中核病院の大館市民病院は高階経和氏の祖父である経本が第3代病院長を務めた病院である。侍医高階家の系譜については不明な点も多いが(文献5)、高階家末裔の高階経和氏自身による報告は幕末の典業寮や明治初期の侍医制度を研究する上で貴重な資料となる。

【文献】

- 1) 寺島俊雄 神緑会館「故医学士神田知二郎君紀念之

- 碑」に書いてあること 神緑会ニューズレター 第6巻3号 p.27-32 (2014)
- 2) 長澤亘 八十八歳夢物語 昭和29年 長和会刊 (私家本)
- 3) 寺島俊雄著 故神田知二郎先生の墓の発見 神緑会ニューズレター 第6巻2号 p.20-23 (2014)
- 4) 高階経和 ヒストリア --- 華岡青洲の高弟 高階経和と初の女医を育てた高階経徳 (1) 大北医報 No.247 p.23-25 (2015)
- 5) 池田文書研究会 池田文書研究 (二十) 高階経本の書簡について 日本医史学雑誌 第45巻3号 p.421-433 (1999)
- (平成30年3月例会)

書 評

スーザン・P・マターン 著, 澤井 直 訳

『ガレノス：西洋医学を支配したローマ帝国の医師』

医学史の通史を大学生向けに教えるとき、ガレノスやガレノス主義を解説する必要がある。そのためには、ガレノスの伝記と、彼の医学、そして19世紀中葉まで大きな影響を与えたガレノス主義を理解しなければならない。この問題について、英語を使う多くの学者は、ガレノス著作の選集、医学史家のヴィヴィアン・ナットンの『古代の医学』(2005)の15章と16章や、哲学研究者のロバート・ハンキンソン編集の『ガレノス研究の必携書』(2008)などを用いてきた(Galen 1997; Nutton 2005; Hankinson 2008)。この状況が大きく改善したのが、2013年にスーザン・マターンが刊行したガレノスの伝記である(Mattern 2013)。マターンはアメリカの医学史家で、現在はイエール大学で教えているが、彼女のガレノス伝は、ガレノスの人生と医学の解説が一冊の書物となり、学術的に緻密であると同時に、他の領域の学者にも読みやすい著作となっている。ことに重要なことは、医学と社会と文化の歴史に関する研究の蓄積である。古代の医学史、社会史、文化史の進展を本格的に学び、古代ローマ帝国の、医療、疫病、政治、社会、文化、学問などのさまざまな領域の歴史からガレノス医学を明らかにしている。古代ローマ帝国の大都市の衛生や疫病の問題点や、奴隷や女性の問題も言及されている。また、ガレノス自身の「多弁性」も研究に利用されている。ガレノスの著作は膨大な量を持つが、そこに書かれ

ている自分自身、周辺の医師、患者についての細かい記述や、医療の思想、方針、行動などについて論じていることが織り込まれている。この素晴らしい英語の書物を、もっとも理想的な翻訳者が日本語の書籍にしたこの訳書は、とても大きな意味を持つものである。

本書が伝えるガレノス医学の三つの重要なものを指摘しよう。もちろんガレノスは、彼の時代から見ると500年ほど前に活躍したヒポクラテスを深く尊敬して注釈本まで刊行していたし、その後発展したギリシア語圏の医学の諸派を学んでいるので、これらの特徴はガレノス自身の独創性を示すわけではないが、ガレノスの体系の中で非常に重要なものとなった。その中の最初の主題が、解剖である。解剖はヒポクラテス文書にはほぼ登場しない概念で、アレクサンドリアのプトレマイオス朝の医師たちが人体の死体解剖を行い、ガレノスもアレクサンドリアで解剖を学んだ。そして、ペルガモンやローマに帰国した後、人体の死体解剖ができないため動物で代用し、ブタやヤギやサルに死体解剖や生体解剖を実際に行った。それはローマの貴族が後援した私的空間での解剖の説明や、ローマの公的な空間での見世物などの形を取った。この解剖重視が、のちの中世のイスラーム世界とヨーロッパ世界、そして初期近代の医学の世界に大きな影響を与えた。日本の医学にも、18世紀になると解剖が巨大な影響を与えて